

“Josephine Stories” に於ける Josephine の感情破綻について

藤 谷 聖 和

A Study of Josephine's Emotional Bankruptcy in “Josephine Stories”

Seiwa Fujitani

I ジョゼフィーヌ物創作の動機

The Basil and Josephine Stories には、いわゆるバジル物、ジョゼフィーヌ物と呼ばれている二つのシリーズがある。前稿（追手門学院大学文学部紀要第18号）で、バジル物がバジル少年の自己形成の軌跡を描いていると指摘したが、これとは対照的にジョゼフィーヌ物ではヒロインのジョゼフィーヌの崩壊への過程が描かれている。Fitzgerald の作品では、通常フラッパーや *femme fatale* が登場しヒーローの「悲しき若者」を翻弄し、その運命を支配し、崩壊させてしまうケースが多いことを考えると、これらの点でジョゼフィーヌは特異な存在として捉えることができる。ジョゼフィーヌ物以後は *Tender Is the Night*（以後 *Tender* と略）の Nicole のような *femme fatale* が再登場し、崩壊する女性像は描かれていない。何故、特異なヒロインであるジョゼフィーヌが描かれたのかをジョゼフィーヌ物創作時の Fitzgerald の精神生活の中に探っていきたい。

ジョゼフィーヌ物は次の五作からなりたっている——“First Blood”（1930年4月5日 *The Saturday Evening Post* 誌に初出。以下発表誌は同じ），“A Nice Quiet Place”（1930年5月31日），“A Woman with a Past”（1930年9月6日），“A Snobbish Story”（1930年11月29日），“Emotional Bankruptcy”（1931年8月15日）。この時期に於ける Fitzgerald は、*The Great Gatsby*（1925年、以後 *Gatsby* と略）で得た作家としての地位を不動のものとすべく次の長編作品 *Tender* の創作にうちこもっていた。しかし、John A. Higgins が指摘するように「*The Great Gatsby* は彼（Fitzgerald）が期待したほどの経済的成功とはならず、再び金儲けのために短編を創作せざるを得なくなる¹⁾」のである。

ジョゼフィーヌ物以前に創作されたジバル物はその創作動機として金儲けの外に1) 手法的に

書きやすいこと、2)「根無し草」的な生活の中で「永続するもの」を過去に求めた、3)一種の“entertainer”として作家としての評判を保ちたかった、4)老いへの不安や葛藤、恐れを挙げてみた。ジョゼフィーヌ物創作時には、てっとりばやい金儲けの外に妻 Zelda との関係が影響してくる。この時期に精神障害を起こした Zelda は精神病院に入院しており、Fitzgerald としては *Tender* 創作への時間を削り治療費を工面すべく、まさに生活のために短編を書きとばさずにはいられなかった。*Tender* が完成しない悩みに加えて、Zelda の発狂は Fitzgerald の苦悩をますます深くしたが、一方では彼女との別居生活で自分自身の生活を顧みて現在や未来を考えるゆとりがでてきたことは明らかである。

Zelda には芸術を通じての自己主張欲にすさまじいものがあり Fitzgerald を辟易させていた。20代後半よりバレエを再開し、熱中していった Zelda は病院でバレエを止められると絵画や創作へと没頭し *Save Me the Waltz* を書き上げたぐらいであった。このように生命力にあふれんばかりの Zelda は「動物的魅力」(Animal Magnetism)に欠けている Fitzgerald にとって当初は魅力ある存在であったのであろうが、次第に疎ましくなってきたことは否めない。別居生活で Zelda を客観的に見られるようになった Fitzgerald は、彼自身や Zelda を批判しているとみられる短編を書き出している。“Babylon Revisited”(1931年2月)では自分自身への反省、“What a Handsome Pair”(1932年4月)では Matthew J. Bruccoli が指摘するように「よい結婚——特に創造的な男性——に必要なのは野心のない妻²⁾」であることを訴えている。

1931年1月に父親が死亡したことも Fitzgerald の女性観に少なからず影響を与えている。執筆中の *Tender* の構想を母親殺しの Melarky version から Dick Diver version に変えて、Fitzgerald 自身の生活を反映するかのごとく精神病の妻を抱える精神科医の夫 Diver 医師を描き、崩壊寸前のダイヴァーを立ち直らせる事件としてダイヴァーの父の死を扱い、父親がいかにダイヴァーの精神的な支えとなっていたかを描いているのである。父親像不在のバジル物は父親 Fitzgerald が強い父親像を懸命に模索する姿を反映していることを前稿で指摘したが、実際に父親を失ってから強い父親像を自覚する傾向がつよくなり、母親コンプレックスの一種の変形と思われる Zelda への感情も変化し、批判の方向へむいている³⁾。

ジョゼフィーヌのように崩壊するヒロインが描かれるのと比例して、「悲しき若者」は、もはや描かれず、崩壊から立ち直るヒーローが描かれるようになる。例えば“The Swimmers”(1929)の Marston や“Babylon Revisited”(1931)の Charlie, “Family in the Wind”(1932)の Dr. Forrest Janny はそのカテゴリーにはいる。*Tender* のダイヴァー医師も Nicole との離婚で完全な崩壊から逃れている点で、このカテゴリーに加えることもできるだろう。ヒーローには中年の男性が登場し、自分の娘、あるいは少女の力で崩壊から立ち直っている。Zelda が入院する前年には、二人の結婚生活を窺わせるような作品“The Rough Crossing”

や “Two Wrongs” を書く一方で, *femme fatale* の妻に打ち勝つ夫が登場する “The Swimmers” を描き, 作品に強い男性像の兆しが現れている。Zelda の入院後は娘 Scottie に母親代りもせねばならなかった Fitzgerald にとって子供は破局をのりこえていく力であったようだ。作品でも “The Swimmers” の “a girl”, “Babylon Revisited” の Honoria, “Family in the Wind” の孤児となった Helen は崩壊寸前のヒーローに生きる望みを与えている。これらの少女はフラッパーではなくて, ヒーローを崩壊させるところか, 逆に活力を与えている。従来のフラッパー対「悲しき若者」の組み合わせは消失し, 中年男性対少女の組み合わせで恋愛関係よりも崩壊からの救済が描かれるようになった。

Higgins によれば, 過去を取り戻そうとする *Gatsby* タイプの作品は1929年発表の “At Your Age” まですで「自己憐愍の悲しき若者」は次第により現実的な主人公となり, 幻想をとりはらい, 苦い過去を顧みて自分の人生を客観的に見て, 罪の荷を受けて, あがないの方向に進んでいくようになる。⁴⁾ 同様に, フラッパーは *femme fatale* 的な「吸血鬼のような妻」あるいは「純情な少女」へと変化していく。⁵⁾ これは Zelda の発狂との関連の外に, Fitzgerald が年令を重ねるにつれて彼の人生観や女性観が変化してきたことにも一因があろう。すでに30歳を越えていた Fitzgerald にとって, 狂騒の20年代の終わりや大恐慌はこれまでの華麗さとは逆の面を示すようになった。後に, 娘 Scottie に宛てた手紙の中で述べているように「破産というものの正確な意味」に気がつき, なんとかして青春や時, 金, 素質の浪費に歯止めをかけたいと願い, それが作品に反映し始めたとも考えられうる。

Ⅱ Fitzgerald 夫妻 1928—33

バジル物同様に, ジョゼフィーヌ物にも過去への郷愁がある。バジル物は Fitzgerald が彼自身の少年時代に素材を見付けながら描いたのに対し, ジョゼフィーヌ物の素材は Zelda より以前に交際のあった Ginevra King にあると言われている。Zelda への批判が Ginevra への思慕の情を募らせたことは理解できるが, ジョゼフィーヌ物最終作の “Emotional Bankruptcy” では従来のフラッパーへの「あからさまな侮蔑」⁶⁾が見られ Ginevra への思慕はない。“Emotional Bankruptcy” は前作 “Snobbish Story” から9箇月後に発表されるという時間的経過があり, この期間(1930年11月—31年8月)に於ける Fitzgerald 夫妻の生活が作品に影響を及ぼしているのであろう。

1930年と1931年は Fitzgerald 夫妻にとって, まさしく「皮膚の裂け目」⁷⁾の始まる年で, その原因となる事件が3つ挙げられる。1930年春 Zelda が発狂, 1931年1月 Fitzgerald の父親が死亡, 1931年11月 Zelda の父親が死亡している。

1931年4月23日に Zelda は結婚10年で Paris 郊外の Malmaison 病院に入院することになるが, 彼女の精神異常はすでに前年より現れている。1928年から29年にかけての冬に Zelda

は短編小説を完成し、以後精力的に創作に没頭し29年の7月頃までに6作書きあげている。しかし、バレエと創作の両立で過労に陥り、異常な素振りが見られるようになる。注意力が散漫になり、簡単な会話でさえ続けることが困難になっている。Riviera で夏を過ごす⁸⁾が、Zelda の病状は悪化しており、10月 Paris への帰途、彼女は突然に車のハンドルをつかんで、崖から墜落させようとする事件を起こしたほどである。翌30年2月に、Fitzgerald 夫妻は北アフリカへ旅行しているが、バレエの練習の中断は Zelda を神経質にして、旅行は休養にはならなかった。Nancy Milford が旅行の際の Zelda の写真を「まるで亡霊につきまとわれているような、死相の出ている顔である。肩をまるめ、目の周囲には深いしわが刻まれ、口はつねに笑いを忘れている⁹⁾」と指摘しているように、Zedal の精神異常はたかまっていたようだ。

Zelda は1930年4月 Malmaison 病院を皮切りに、5月には Valmont 病院、6月には Prangins 病院へと入退院を繰り返し精神治療をうけている。Zelda が医師の忠告にさからって Malmaison 病院を退院した頃、Fitzgerald は Maxwell Perkins に「Zelda は過労から一種の神経衰弱に陥り、おかげで私は今日まで21日間も1行の小説も1通の手紙も書いていません⁹⁾」と執筆が進まぬ苦悩を書いているが、やがてその苦悩は Zelda への怒りへと変わる。Prangins 病院では、おそらく、療法の一手段と思われるが、Zelda についての概要を提出するように夫の Fitzgerald と Zelda の身内に求められている。Fitzgerald は Zelda が「いつも敗北主義的なところがあった」ことや「困難や障害を乗り越えて道を切り開いていく僕の能力に異議をさしはさむ宿命論者¹⁰⁾」であると Zelda を批判している。

Prangins 病院に入院中、Zelda と Fitzgerald は100通以上の手紙をやりとりする。Milford はこの時期の Zelda の手紙には「独特の声と調子」が有り「求婚時代に一時別れ別れになっていた1919年の春に彼女が書いた率直な手紙に一番よく似ている¹¹⁾」と指摘しているが、Zelda にとって手紙を書くことは、自分自身をみつめることを強いられることだった。Fitzgerald と距離をおくことで、Zelda は Fitzgerald との関係をもつめるようになったのであろうが、1919年時代の絶対の自信はなくなり苦悩の世界を見せており、Fitzgerald への依存がみられる。「あなたは私を再教育して下さいする必要があります、＜中略＞どんなにあなたに依存していたか以前は気がつきませんでした＜中略＞もっと違った人間になりたいと思います¹²⁾」と自分への反省や Fitzgerald への依存を記している。

が、一方では Fitzgerald と張り合う気持ちがあることにも注目すべきだろう。6月の中旬に Zelda は悪性の湿疹におかされているが、アレルギーではなくて、心理的な影響によるものと判断されているからである。9月になっても治癒しない湿疹にたいして催眠術療法が取られたところ、13時間の催眠状態後に目覚めた彼女から湿疹は消えていた。Zelda が「湿疹と精神状態はつながりがあるとおもう」、「意識が正常で夫婦間の葛藤にひそむ危険を感じたとき、湿疹が現れた。いわば、一種の警戒警報だった¹³⁾」と捉えているのは正しい。翌31年1月に

Fitzgerald の父親死亡の報告を聞くと湿疹が現れた Zelda であるが、葬儀のため Fitzgerald がアメリカへ去ると彼女の湿疹は快方に向かっているのだ。Milford は「それ（病状の快方）を Scott (Fitzgerald) の留守と結び付けて考えた医師は一人もいなかったが、確かに関係があったにちがいないと思われる」と指摘し、「顔の表情に消しがたく張り付いていた妙な薄笑¹⁴⁾いも消えた」と例証しており、Zelda の潜在意識では Fitzgerald への対抗心が大きな存在であったことが分かる。

距離をおくことは Fitzgerald にも必要であったと思われる。Fitzgerald は Zelda の医師 Forel 博士に自分達の結婚生活への問題を尋ねているが、まるで医師が患者をみるような目で客観的に Zelda をとらえている。自分を Zelda と比較して「僕は青年期の7年間、血をはくような努力をし、粘り強い自己修練によって6年にして若いアメリカの作家のなかで押しも押されぬ優位を獲得するに至りました」と自賛するいっぽうで「(妻は)一度も自分の才覚とか頭とかを使おうとしたことのない女です¹⁵⁾」と批判している。Zelda が自分の心から遠ざかっていくようすを次のように記し愛情が冷えている。

She no longer read or thought, or knew anything or liked anyone except dancers and their cheap satellites. People respected her because I concealed her weaknesses, and because of a certain complete fearlessness and honesty that she has never lost, but she was becoming more and more an egotist and a bore. Wine was almost a necessity for me to be able to stand her long monologues about ballet steps, alternating with a glazed eye toward any civilized conversation whatsoever.¹⁶⁾

Forel 博士は Zelda の診断のために当時のヨーロッパにおいて精神病の権威であった Paul Eugen Bleuler 博士を招いていた。Fitzgerald は二人の医師に「Zelda はつねに安定した強い性格の男性にたいする好みを示している¹⁷⁾」と説明し Zelda への態度を変えることによって治療に効果があるものと尋ねている。二人の医師は「鍛えられた鋼鉄のような性格が助けになることはありますが、Fitzgerald 夫人は Fitzgerald 氏のなかの芸術家を愛し結婚したので¹⁸⁾す」と答えており、Fitzgerald のなかに「強い性格の男性」を認めていない。Zelda の男性観について Fitzgerald が漠然と考えていたことは後に明らかになっている。1932年に Phipps 病院の Thomal Rennie 医師に自分達夫婦を次のように語っている。

In the last analysis, she is a stronger person than I am. I have creative fire, but I am a weak individual. She knows this and really *looks upon me as a woman*. All our lives, since the days of our engagement, we have spent hunting for some man Zelda considers strong enough to lean upon. I am not.¹⁹⁾ (Italics mine)

Zelda が自分を「女性と見なしている」と Fitzgerald が感じるに至ったのは Zelda の *Save*

Me the Waltz の原稿を読んでから特に強まったのではないだろうか。1931年9月に Zelda が Prangins 病院を退院し、Fitzgerald 一家はアメリカに渡り Montgomery で生活を始めている。Fitzgerald としては、正常な結婚生活、そして *Tender* の執筆に専念できるのではないかという期待があった。しかし、Zelda は病気が再発し、1932年2月に Baltimore の Phipps 病院に入院することになる。驚くべきことに、Zelda は入院中に小説を書き始め3月初旬までに完成させている。それが多分に Zelda の自伝的小説 *Save Me the Waltz* で、「Zelda が自分の小説に投影している自我のイメージの種々相を解明する鍵を提供してくれる」²⁰⁾ 作品である。Milford は Zelda 像を反映する Alabama に「男」女^{オトコオンナ}の役を演じる人間像を捉えているが、Fitzgerald のなかの「女性」に対立して Zelda のなかの「男」女^{オトコオンナ}すなわち「男性」が現れているのは関心をひくところである。Milford はアラバマの「男」女^{オトコオンナ}性は「常に厳しい性格である」父 Beggs 判事と「茫漠として柔和な」母 Millie の対照的な関係に原因があるとしている。²¹⁾ Zelda が母 Minnie Sayre の柔和な性格を受け継いでいたならば、夫 Fitzgerald への対抗心も無かったかもしれないが、「確固たる規律」であった父 Sayre 判事の死によって精神的解放感を得て彼女のなかの「男性」が強まっていったのだろう。作品中にも「父が死んだら、このあたしが頼みの綱になるんだわ」²²⁾と Zelda の独立心が反映されている。

Prangins 病院を退院するさいに Zelda の症状は「劣等感（主として夫への）に対する反²³⁾応」と要約されている。「知的というよりは直観的であり、教養があるというよりは才気²⁴⁾煥発」な Zelda はバレエや創作の強烈な自己表現で Fitzgerald に立ち向かおうとしていた。しかし、同病院で治療の一手段として家族と自分自身について感じていることを書くように要求されると「私は夫に頼っています。その夫が私は治らなくてはいけないと言いました。それは受け入れられます。ですが、いまはもう夫とは肉体的な慰以外にはほとんど何のつながりも感じられなくなっていますから、私がこの療養所をでるのは、夫とは無関係に自由に空気をすえる自信がついたときでしょう」²⁵⁾と Fitzgerald への依存と独立の要求という二律背反的な感情が見られる。Phipps 病院時代にも Zelda は自分を「サメの下を泳ぎ回り、下品にもそのおこぼれで生活している（と私は信じている）あの小魚です」とか「寄生虫的存在」²⁶⁾とにたとえて依存心がみられる一方で、*Save Me the Waltz* の出版を Fitzgerald に差し止められた際には「したいことはなんでも、なんとか時間をやりくりしてきたんだ。亭主なんかに私の本のことをツベコベ²⁷⁾言われてたまるか」と反発している。

1932年6月に Phipps 病院を退院した Zelda は Baltimore 郊外の平和荘で Fitzgerald と生活を始めるが、二人の「皮膚の裂け目」は増すばかりであった。Zelda の世話、娘 Scottie の保護役、そして *Tender* の最終原稿を仕上げる苦悩、家庭内をまとめる緊張などで結婚生活の腐蝕が進んでいた。苦悩から逃れようと深酒をし、その結果1933年春には Zelda と二人で週に一度 Phipps 病院に訪れ問診を受けている。Zelda への感情は次第に恨みや怒りへと

変化していき「君の正気と引き換えに僕は自分の健康を犠牲にしている²⁸⁾」と批難し、Meyer 医師に「私の金、私の名声、私の愛である温室」に依存しながらなんの恩義も感じない Zelda に「孤独と、すべての人の忍耐を疲弊させたことの苦しみを感じとらせてもらいたい²⁹⁾」(傍点 Fitzgerald) と望むほど Zelda に攻撃的になっている。Zelda が *Save Me the Waltz* を完成した時点では「Zelda が僕の精神や内臓や神経組織や腰から少しずつ削り取ったものを糧として、こういった履歴を作っていくのを見ていることはできません³⁰⁾」と怒りを現している。この際、Fitzgerald は医師から離婚を勧められているが、はねつけている。しかし、1933年5月28日に、平和荘で Rennie 医師を司会にして Zelda と Fitzgerald の間で二人の問題が検討された際、Fitzgerald は初めて真剣に離婚を考えている。当時 Zelda が *Tender* の素材に酷似した精神異常をテーマにした小説にとりかかっており Fitzgerald には許すことができなかったのだ。創作意欲に関して「ずばぬけた女流作家になることは、Scott (Fitzgerald) なしの生活の代償となるのか³¹⁾」との Rennie 医師の質問に Zelda は単刀直入に答えず、「(小説を書くことに) Scott の考えを受け入れさせられるのはうんざりだ³²⁾」と反発しているものの、依存を断ち切ることはできなかった。お互いに相手を切り離すことのできない二人は「それぞれ自らを減ばし³³⁾」緊張と不信のもとで暮らさねばならなかった。

Ⅲ 崩壊の兆し

ジョゼフィーヌ物の各作品ではジョゼフィーヌの奔放な行動が描かれている。前半ではジョゼフィーヌのフラッパーぶり、後半では彼女の感情破綻に重点がおかれて、各作品に一貫するテーマがないようにみえる。しかし、各作品には旧世代の道德観とジョゼフィーヌに代表される新世代の道德観の摩擦から生じる葛藤の軌跡がみられる。自我と一般社会の葛藤でバジルが精神的成長を遂げたのにたいし、ジョゼフィーヌの場合は葛藤のなかで感情破綻へと向かっている。1920年代に描かれたフラッパーたちとは異なり1930年代初期に描かれたフラッパーたちは1914年頃の舞台設定で描かれながらも、その放縦さのなかで「ひび割れ」が大きくなり崩壊する運命をいだいている。

各作品からジョゼフィーヌの感情破綻の軌跡を追ってみる。まず“First Blood”では姉の婚約者 Anthony Harker を横取りし、あげくの果てには彼を捨ててしまうジョゼフィーヌが描かれている。16歳のジョゼフィーヌは人前で母親に平然と「バカ」と言っているのけるような、言わば、旧世代の道德観に挑む「手に負えなくなるように運命づけられた世代の、自覚せぬパイオニア³⁴⁾」なのである。

「自分が愛するひとはその返礼として自分を愛さなくてはならない」(196) とするジョゼフィーヌの恋は対象が Ed や Travis などの少年から離れて青年へと移っていく。アンソニーに関心をもつと、トラヴィスの話しぶりは退屈になってしまい、ジョゼフィーヌは「自分のなか

で何が起っているのだろう」(186)と感情の変化に気が始める。彼女の「早すぎる冒険」³⁵⁾は両親にとって不安で、寄宿学校におくりこんで行動を縛れば安全と考えている。しかし、ジョゼフィーヌの結婚観をみると、両親や姉に代表される旧道徳世界を皮肉な目で捉えている。姉の友達の結婚式に出席したジョゼフィーヌは姉とは異なる感情を抱く。「汚れがなく、かわいくて、神々しく、幸福感に満ちた、申し分のない花嫁」は「愛され敬われた女の子のすばらしく、輝くばかりの青春への終わり」(200)でしかない。ハンサムで人気のあるアンソニーを姉から奪いながら、彼との結婚を考えない点にもジョゼフィーヌの特色がある。アンソニーがジョゼフィーヌとの結婚を考え始めると、彼女は自分の世界に帰ってしまう。ジョゼフィーヌは「ただ、自分のために必要とされるものを欲しがることを欲しただけで、実際にはその実現など望んでいなかった」(191)のであり「(Anthony) Harker を欲しかったのではなくて、望めば彼も手に入ることが分かる満足感」³⁶⁾を欲していたのだ。トラヴィスと結婚しそうなになった噂について真偽を尋ねられても、動揺のいりもみせず否定して「こんな美人が実際には悪いことはできない」(203)と信じ込ませるしたたかさを備えているジョゼフィーヌであるが、彼女の自信は失われつつある。

“A Nice Quiet Place”では、ジョゼフィーヌは“speed”であることの罰として避暑地 Lake Forest へは連れていってもらえず「すばらしく、静かな所」の Island Farms にとじこめられることになる。彼女の「唯一の関心は恋をしていることと愛している人物と一緒にいること」(206)だが Island Farms では「愛の神秘的な用語」を聞き「あのうきうきさせる気持ちを味わう」(208)ことは期待できない。ところが、ジョゼフィーヌの「早すぎる冒険」はこの Island Farms で理想の男性 Sonny Dorance との出会いでより拍車をかけられる。ソニーは「愛、ドラマ、あるいは彼女が何よりも好きな、あのどうしようもない無頓着さ」(215)が実行可能な人物であるとジョゼフィーヌは喜ぶ。彼こそは彼女に「うきうきさせる気持ちを味わわせてくれる」男性なのだ。

ソニーの正体は、彼の友人によって明らかにされる。Harvard 大学の学生で、「信じられないほどの金持ち」で、「乙女たちの憧れ」で、「ずっと美人につきまとわれ」て「15歳のときから既婚女性や社交界に出る年頃の女性、コーラスガールに追いかけられ神話になっている」(220—21)人物で、「動物的魅力」には欠けるものの、従来の「悲しき若者」に地位が備わっており、Fitzgerald の男性像に変化が見られる。

“First Blood”と同じく、この作品にも結婚式の描写があり、ジョゼフィーヌの結婚観が示されている。“First Blood”での結婚式のように「悲しさ」はあるものの、ここでは「すばらしく、悲しい」式でジョゼフィーヌと姉によってその明暗が描かれている。

It was a lovely, sad wedding; the two sisters, light and dark, were a lovely contrast; there was as much interest in one as in the other. Josephine had

become a great beauty and the prophets were busy; she stood for the radiant future, there at her sister's side. (223)

結婚する姉が「悲しく」、「暗い」のに対し、理想の男性を追いかけようとするジョゼフィーヌが「輝かしい未来」を現している。Fitzgerald が男性の結婚観を女性に投射している感も強いが、ジョゼフィーヌの結婚観が彼女のフラッパーぶりや感情破綻への経路を自然にみせていることは否めない。

“A Woman with a Past” ではジョゼフィーヌは17歳になっており、感情破綻の予兆を示している。彼女は、これまでとは異なる男性の魅力を発見する。作品では、ジョゼフィーヌと対照的な女性 Adele Craw との比較で新しい男性像が示されている。アデルは「全校の模範生」で「澄んで品のある目とピアノの脚のような頑丈な脚」(226)の美人で、男女の間には「完全に健全な友情がある」と信じそれを実行する人物で、ジョゼフィーヌには「別の人種」である。ところが、このアデルが New Heaven の大学舞踏会では注目の的となりジョゼフィーヌは驚く。New Heaven では「男が偉いと連れてきた女まで偉くなる」(230) のであって、「女は美しく魅力的であることで人気を得る」(231) というジョゼフィーヌの信条は通じない。

She was discomfited by the unfairness of it. A girl earned her popularity by being beautiful and charming. The more beautiful and charming she was, the more she could afford to disregard public opinion. It seemed absurd that simply because Adele had managed to attach a baseball captain, who mightn't know anything about girls at all, or be able to judge their attractions, she should be thus elevated in spite of her thick ankles, her rather too pinkish face. (230)

アンソニー、ソニーと恋の変遷をしてきたジョゼフィーヌが次に魅力を感じる男性はアデルの恋人 Dudley Knowleton である。しかし、「大体においてジョゼフィーヌの気に入るような顔ではなかった」(227) ノウルトンは最初から彼女の興味をひいていない。Yale 大学の男性社会では魅力ある男性の基準は男性によって決められる。「人気と業績」が男性の価値を決定する世界では Bones 会員の最有力候補で舞踏会運営委員長のノウルトンのような「活動的で有能な」男性が中心人物となることを知り、ジョゼフィーヌは「男というものに初めて会ったような気がした」(223) のである。「あなたをお手本にしている人が、ここにはどのくらいいるかしら。私が男だったら、あなたのようにになりたいわ」(232) とノウルトンに話すように、ジョゼフィーヌの理想の男性像は大きく変化して「動物的魅力」を求めている姿を捉えることができる。アデルが女性的女性ならば、ジョゼフィーヌは男性的女性で「愛される以上に愛せる男を探す」(226) 積極的な生命力を持つ女性でその生命力のためにアデルのような恋には満足できない。

アデルとノウルトンのカップルから影響を受けたジョゼフィーヌはアデルのイノセンスをまねようとするが、皮肉なことに放校処分になる。上級生舞踏会の日に、他の女学生のように寮の窓から男子学生とふざけたかったのを自重していたにもかかわらず謹慎処分を受ける。謹慎中に、同情から、学長の甥 Ernest の接待役を命じられ、アデルのように振る舞おうとするが皮肉な結果に終わる。案内中に足をすべらせてアーネストに抱きとめられたところを見とがめられて放校処分となる。アデルに代表される旧世界の生き方をまねようとしても、受け入れられず究極まで従来の生き方をしていく運命にある。

ノウルトンの自分への気持ちが愛情ではなく親切心であることを知り、ジョゼフィーヌは「生まれて初めて彼女のほうから男性を求めて失敗したことを知った」(244) ののである。この初めての挫折からジョゼフィーヌは「男には二種類ある——遊び相手としての男と、結婚相手としての男」(244) があることを知らされる。これまでの男性はすべて「遊び相手としての男」で、ノウルトンは「結婚相手としての男」でジョゼフィーヌの美しさや魅力は通用せず「足首が太く、顔はピンクの色が勝ちすぎている」(230) 女性としての魅力に劣るアデルが彼の心をとられている現実を認めざるを得ない。この苦い体験から「ロマンチックな30分のために将来ふさわしいときに——まったくまじめな形で——ひらけてくるかもしれない可能性を売ってはいけない」(244) と決心をするが、Princeton 大学を放校された学生に誘われると、たちまち「ロマンチックな30分」を過ごしに出かけてしまい感情破綻の道を歩んでいる。

ジョゼフィーヌの放校は Ginevra の Westover 校放校事件をモデルにしていると言われている。André Le Vot は Ginevra が「体面を危うくする状態で異性といところを見つけられた³⁷⁾」と指摘し、Richard Lehan は「ちょうど Miss Hillard が Ginevra を放校し、後に撤回したように Miss Breveton はジョゼフィーヌを放校し後に撤回している。が、Ginevra もジョゼフィーヌも学校に戻らなかった³⁸⁾」と作品と類似する事件があったことを指摘している。また、Lehan は他の登場人物にも言及している。Hot Spring に滞在中のジョゼフィーヌをドライブに誘う Gordon Tinsley は Ginevra が結婚した William Mitchell と同じく「Chicago 大学野球部のキャッチャー」であること、「2月に Princeton を放校された若者」³⁹⁾と Fitzgerald との共通点を指摘している。

ジョゼフィーヌ像の Ginevra モデル説には様々な意見がある。Matthew J. Bruccoli の「Ginevra King を元⁴⁰⁾にしている」や Kenneth E. Eble の「Ginevra King についての Fitzgerald の記憶に大いに因るところがある⁴¹⁾」、Henry Dan Piper の「Ginevra King についての思い出から創造された⁴²⁾」と Ginevra 一辺倒の意見がある一方で、Le Vot のごとく“A Woman with a Past”は「Ginevra と Zelda の組み合わせ⁴³⁾」と例外を捉える意見もある。Dean F. Walton は「Ginevra への思い出」を一部認めてはいるものの「ジョゼフィーヌが理想から、あまりにもかけ離れている」ことを理由に「ジョゼフィーヌをあまりにも (Ginevra)

King と結びつけることは King を侮辱することである⁴⁴⁾」と反論している。

Le Vot によれば Ginevra は多分に *femme fatale* 的要素を持っており、彼女にとって恋は「まるでオークションのようなもので、常に不確かな結果との果てしない戦い⁴⁵⁾」で、彼女を勝ち得たと考える男性には嫉妬でうまく操るなどジョゼフィーヌと同様の資質が窺われる。確かに、Ginevra 自身がジョゼフィーヌとの類似性を認める手紙を書いている。が、そのためにジョゼフィーヌ=Ginevra と考えるのは早計であろう。

“... at this time I was definitely out for quantity, not quality, in beaux, and, although Scott was top man, I still wasn't serious enough not to want plenty of other attention... I was thoughtless in those days and too much in love with love to think of consequences. These things he has emphasized—and overemphasized⁴⁶⁾—in the Josephine stories, but it is only fair to say I asked for some of them.

「恋に恋した」Ginevra の生活ぶりがジョゼフィーヌに反映されているのは認めているものの「強調しすぎ」の指摘を見落としてはならない。

Ginevra がジョゼフィーヌのモデルであることは全体的に認められないものの、ジョゼフィーヌは Ginevra の資質を持っており、Fitzgerald の好きなタイプの女性であった。Le Vot が指摘するように他の作品にも彼女のような *femme fatale* が登場しており、*This Side of Paradise* の Isabella, “Winter Dreams” の Judy Jones, *Gatsby* の Daisy, *Tender* の Nicole のように「あこがれの人物」や「金持ちで移り気の人物」で、「どうしようもない誘惑のイメージ⁴⁷⁾」を持っていて Ginevra の影響が見いだされる。

Ⅳ フラッパーの崩壊

“A Snobbish Story” と “Emotional Bankruptcy” ではジョゼフィーヌのよりシリアスな恋を見ることができる。

“A Snobbish Story” では、これまでのジョゼフィーヌ物とは異なる要素が見られる。階級の異なる世界の既婚男性がジョゼフィーヌの恋の対象となっているのである。ジョゼフィーヌは、積極的に近付き自から演出する劇に出演させようとする新聞記者 John Baily に新鮮な魅力を感じる。ジョンが既婚者であることが分かっても、彼女は “A Nice Quiet Place” のように驚いて引き下がらず、むしろ「感性的なおののきがあり、ジョンが結婚していることは逆に魅力があると思う。＜中略＞閉ざされ、禁じられたドアがくると開き魅力ある廊下を現した」(259) と感じている。これはジョゼフィーヌが父の浮気現場（実は義弟の女性関係の調停中）を見たときと誤解した直後の感情で、父への不信感が影響を及ぼしている。それ故、ジョンの妻の自殺騒ぎのあとで父への誤解が解けるとジョンへの興味も醒めて「この世の金持ちで力

ある者」(269)の世界に帰ってしまう。

“A Woman with a Past”で感情破綻のテーマが明確になったにも拘わらず、次作“A Snobbish Story”でそのテーマをより展開させていないのは「商業的成功が尽きないようにするため」⁴⁸⁾とか「ジョゼフィーヌへのアイデアが尽きた」ので「階級差のテーマに帰ってジョゼフィーヌの成長の型をつぶしてしまった」⁴⁹⁾との指摘がある。最終作“Emotional Bankruptcy”がでた段階でみると“A Snobbish Story”は中弛みの感を与えてしまう。しかし、既婚男性にジョゼフィーヌが惹かれるのは感情破綻の過程で見落とせない点である。

既婚男性に魅力を感じる娘は後に *Tender* の Rosemary 像があるが、ジョゼフィーヌ物がその起因であることを示唆するエピソードを Lehan は挙げている。ジョゼフィーヌ物を *Taps at Riviera* に収録の際、“A Nice Quiet Place”の一箇所“Josephine”が“Rosemary”となっており、Fitzgerald はもちろん、編集者もそのミスに気がつかなかったというのである。⁵⁰⁾ “A Nice Quiet Place”執筆時に Fitzgerald は *Tender* に取り組んでおり、ジョゼフィーヌ像がローズマリー像にというより、逆にローズマリー像が“A Nice Quiet Place”頃からジョゼフィーヌ像に影響を及ぼし始めたとも考えられ、“A Snobbish Story”で既婚男性に惹かれるジョゼフィーヌが登場するのは偶然のことではない。

“Emotional Bankruptcy”は Higgins が指摘するようにジョゼフィーヌ物全体の「縮図」⁵¹⁾で、ジョゼフィーヌのフラッパーぶりや感情破綻の予兆、そして彼女の感情破綻が描かれている。17歳のジョゼフィーヌは「一日ごとにより芳潤に見事に開花していく美しさ」(271)であるが、その頂点に達しようとする頃に感情破綻がやってくる。大学の舞踏会はまだ二度目でありながら、彼女はほとんど楽しむこともなく、言い寄る男性は「ダミー」のようで「棒きれのように存在感がない」(275)。友達の相手役の男性を誘惑するがなにも感じず「彼は魅力的なのに私はキスを全然楽しんでいなかった」(275)ことに気づき愕然とする。以後1年間、ジョゼフィーヌの恋からは「活気や情熱がなくなって」おり、「技巧をこらして行われるゲーム」(276)にすぎなくなっている。理想の男性像は「結婚するための男性」へと変化し、“A Woman with a Past”のノウルトンの影響を受けてか、ハンサムでなくとも「指導者」たらん人物を理想としている。

ジョゼフィーヌが恋への情熱を再び感じるのは Edward Dicer との出会いによる。エドワードがフランス空軍の制服で現れると、彼女は「人生で初めて自信をなくしたように感じ、全く何も言えなく」(278)になっている。ヨーロッパ大陸での大戦はアメリカでは二面記事でしか扱われず「アメリカは自分の殻にとじこもって信じられないほど退屈していた」(278)ことも手伝って、ドイツ軍に撃墜され捕虜となりつつも脱走したエドワードの存在は「巨大で、血に染まったおとぎ話の中から出てきた」(278)ように思える。野性味があり、指導者タイプで、英雄であるエドワードは、まさにジョゼフィーヌの求めている人物で「『ついに現れた』と何

かが彼女の心にささやく」(280) のである。

エドワードのプロポーズで幸福の頂点に達したジョゼフィーヌに感情破綻が訪れる。エドワードの「強く豊かな、注意せずにはいられないような声」(286) を聞きながらも、彼女の内なる感情は破綻している。「あなたが私にキスしたとき、私は笑いたかったの」(287) とジョゼフィーヌの感情破綻があらわれ、「使ったら無くなってしまう」事実が自分自身の感情にもあてはまることをジョゼフィーヌは認めざるを得ない。

She was very tired and lay face downward on the couch with that awful, awful realization that all the old things are true. One cannot both spend and have. The love of her life had come by, and looking in her empty basket, she had found not a flower left for him—not one. After a while she wept.

“Oh, what have I done to myself?” she wailed. “What have I done? What have I done?” (287)

ジョゼフィーヌに感情破綻を知らしめるエドワードが「フランス空軍の飛行士」であることは、Fitzgerald の男性像を見るうえで興味ぶかい。男性的な強さ、さらに軍人という点でエドワードは *Tender* の Tommy Barban との類似性がみられること、そして、1924年に Fitzgerald 夫妻が Riviera 滞在中に Zelda が恋愛事件を起こし、相手が「フランス海軍の飛行士」であったからである。Brucoli によればトミー像は Zelda の恋愛事件の相手 Edouard Jozan 像、外には Mario Braggiotti, Tommy Hitchcuck, Percy Pine, Denny Holden 像が混合され、Hemingway 像も影響している⁵²⁾。いずれも Fitzgerald に欠けている「動物的魅力」を持った人物であることが分かる。

Jozan は Fitzgerald 夫妻が Riviera 滞在中に Zelda と親しくなった。当時 Fitzgerald は *Gatsby* の創作にうちこんでおり、昼間は浜辺にでていた Zelda はフランス人飛行士のグループと知りあう。若い将校らが彼女の関心を引こうと競ったことは結婚前の Montgomery 時代を思いおこさせた。特に Jozan が Zelda の心を奪ったのは、Montgomery 時代の飛行士同様に、Fitzgerald 一家が滞在するマリー荘の屋根すれすれまで急降下を試みる曲芸飛行で敬意を表したことである。しかし、Jozan の魅力はそれに留まらず、「指導力、スポーツマンの能力、軍人らしい機敏さ」があり「Fitzgerald に欠けていた資質」を備えていたことである⁵³⁾。Le Vot が「Jozan, Buchanan, Barban——三つの名前は韻があい、三人は同じ種類、征服者で全盛の英雄⁵⁴⁾」と述べているように、Jozan は「悲しき若者」とは対照的な男性的資質——動物的魅力——を持った男性であった。

Fitzgerald の作品では、「悲しき若者」が Jozan タイプの男性にフラッパーの恋人を奪われるストーリーの作品が多く創作されてきたが、1928年8月発表の“*At Your Age*”以降は「悲しき若者」は登場せずヒロイン像も変化してくる。崩壊寸前の主人公を救う少女であったり、

バジル物に於けるようにバジルの精神的成長を促すフラッパーで、ジョゼフィーヌのように感情破綻をきたすフラッパーやヒーローを崩壊に追いやるフラッパーは、もはや見られない。この変化の一因に1924年の *Zelda* の恋愛事件を捉えることができる。1925年発表の *Gatsby* と1934年発表の *Tender* の両作品で、妻に言い寄る男性と夫との対決が描かれているのだが、この9年間でその夫の態度は変化している。*Gatsby* では妻 Daisy をめぐる対決で夫 Tom Buchanan は *Gatsby* に「君は気でも狂ったのか<中略>デイジーは僕と結婚したときに僕を愛していたし、今でも僕を愛しているのだから⁵⁵⁾」と対抗し妻への愛情がみられる。一方、*Tender* では Nicole をめぐる対決で夫 Dick Diver は、言い寄る Tommy に対抗する言葉を何も語らず、離婚にも「大体において賛成」で「ニコルと僕はお互いに理解しあっている⁵⁶⁾」と述べながらも夫としての愛情は見られず、医師と患者との間の感情しか存在していない。

Zelda への愛情の変化は *Save Me the Waltz* が関連してくる。*Zelda* がその作品で1924年の恋愛事件を扱っているのだ。Fitzgerald は1932年に *Save Me the Waltz* の原稿を読むと、それを *Zelda* と *Jozan* の情事の証拠とみなして、*Zelda* の医師に「僕が家に落ち着きそうだと思えるようになるやいなや、たちどころに彼女は僕を裏切りました。自分から告白したのです。彼女の書いた本を読んで下されば明らかです⁵⁷⁾」と訴えている。作品ではヒロインの Alabama と浮気の相手であるフランス人の飛行士 Jacques との間にキス以上のことは書かれていない。しかし、Milford は特に「スイカズラ」のイメージに注目して、アラバマとジャックとの関係を説明している。作品中で Knight 夫妻は、Fitzgerald 夫妻と同様に New York を脱出して Riviera に向かうが、その際に南部に関連する自然描写がみられる。その中で「もつれあったスイカズラにが⁵⁸⁾んじが⁵⁹⁾らめになり、かよわいケシの花が土手道に血を流し、ブドウ園がどつどつの岩肌にし⁵⁸⁾が⁵⁹⁾みついていた」(傍点 Milford) とスイカズラが描かれているが、これは「意識的」に使われていると Milford は主張している。アラバマが会合うフランス人飛行士ジャックの姓が Chevre Feuile (スイカズラ) で「彼 (Jacques) を情景に結び付けようとする意識的な試み⁵⁹⁾」であると指摘している。Fitzgerald にとって *Save Me the Waltz* は *Zelda* の恋愛事件を思い起こすことになり、*Zelda* への訣別の感情をもたせたのではないだろうか。崩壊するフラッパー像は *Zelda* への訣別と捉えられる。

V 結 論

“Emotional Bankruptcy” で、まさに「感情破綻」のジョゼフィーヌが描かれるようになる経路を再度 Fitzgerald の生活のなかに探ってみると、1930年4月に始まる *Zelda* の発狂やそれに伴う別居生活、1931年1月 Fitzgerald の父親の死、さらに *Zelda* の *Save Me the Waltz* が Fitzgerald の女性像に変化を与えていることが分かる。Milford は「彼 (Fitzgerald) が1930年に母親殺しを主題にした小説の構想を断念した裏には、おそらく *Zelda* の最初の発病の影

響が大きく作用していた⁶⁰⁾」と記しているが、単に病気の影響だけとは考えられない。母親殺しの主題に固執する必要がなくなったと捉えられないだろうか。Fitzgerald が母親を嫌いながらも、母親とよく似たタイプの Zelda と結婚したのは母親コンプレックスの一種の変形であり、Fitzgerald を「女性」と考える「男^{オトコ}女^{メナ}」Zelda に対決し、打ち勝つことが Fitzgerald の潜在意識にあったのであろう。バジル物でバジル少年のイニシエーションストーリーを描いたのは強い父親像模索の姿で、いわば母親コンプレックスを払拭しようとする姿なのである。同じ頃の作品では、“The Swimmers” の Marston, “Babylon Revisited” の Charley, “Family in the Wind” の Dr. Janny は強い男性、強い父親像を現して「悲しき若者」の面影はなく、Zelda に打ち勝った Fitzgerald 自身の姿を反映している。

ジョゼフィーヌに感情破綻をもたらしたのは「早すぎる冒険や放縦さ、罪を正当化すること⁶¹⁾」の結果であった。それらは妻 Zelda に精神異常をもたらしたものであった。Zelda との別居生活は Zelda や自分自身をみつめる機会を Fitzgerald に与えている。“Crack-Up” (1936) や “Handle with Care” (1936) では自らの感情破綻を分析して、人や物事への興味を感じられなくなり書くことができなくなった作家のことや「自分の心身を抵当にして」枯渇したことなど、才能浪費への後悔を書いている。娘 Scottie には、精神的破産状況の危険を説き「危ないのは、持ってもいない資力——物心ともに——を持っていると想像することだ<中略>破産というものの正確な意味を知っていますか。持ってもいない資産をかたに金を引き出すことだよ」と注意を促している。後に、Scottie に宛てて「おまえには私たちという立派な悪い手本がある。何でも私たちがしなかったことをしていれば、おまえは大丈夫だ⁶³⁾」と死の直前に書いているが、ジョゼフィーヌ物は一方では Zelda への訣別を描き、一方では娘には違った人生と願う Fitzgerald の父性愛が描かせた作品と言える。

Notes

- 1) John A. Higgins, *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Stories* (St. John's University Press, 1971), p. 94. もっとも、1925年から1927年にかけて、原稿料が四度値上がりし、一作につき2000ドルから2500ドルを得られることもあって一般受けする短編を書くのを止められなかった事情もある。
- 2) Matthew J. Bruccoli, *Some Sort of Epic Grandeur* (New York & London, Harcourt Brace Jovanovich, 1981), p. 331.
- 3) See 拙稿「フィッツジェラルドの女性像——フラッパーの崩壊について——」『文学と評論』第2集第2号, 1986。
- 4) Higgins, p. 130.
- 5) Ibid.
- 6) Robert Sklar, *F. Scott Fitzgerald: The Last Lagoon* (New York: Oxford University Press, 1967), p. 241.
- 7) Nancy Milford, *Zelda* (New York: Harper & Row, 1970), p. 272.
- 8) Ibid., p. 157.

- 9) Andrew Turnbull, ed., *The Letters of F. Scott Fitzgerald* (New York: Scribners, 1963), p. 222.
- 10) F. Scott Fitzgerald to Dr. Oscar Forel, June 8, 1930, quoted in *Zelda*, p. 163.
- 11) Milford, p. 166.
- 12) Zelda S. Fitzgerald to F. Scott Fitzgerald, quoted in *Zelda*, p. 167.
- 13) Milford, p. 177.
- 14) Ibid., p. 186.
- 15) F. Scott Fitzgerald to Dr. Oscar Forel, quoted in *Zelda*, p. 171.
- 16) Ibid.
- 17) Milford, p. 180.
- 18) Ibid.
- 19) Ibid., pp. 261-62.
- 20) Ibid., p. 228.
- 21) Ibid., p. 229.
- 22) Zelda S. Fitzgerald, *Save Me the Waltz* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1967), p. 195.
- 23) Milford, p. 191.
- 24) Ibid., p. 179.
- 25) Ibid., p. 175.
- 26) Zelda S. Fitzgerald to F. Scott Fitzgerald, quoted in *Zelda*, pp. 252-53.
- 27) Milford, p. 253.
- 28) Ibid., p. 270.
- 29) Ibid., p. 271.
- 30) F. Scott Fitzgerald to Dr. Mildred T. Squires, quoted in *Zelda*, p. 222.
- 31) Milford, p. 274.
- 32) Ibid., p. 275.
- 33) F. Scott Fitzgerald, "Written with Zelda Gone to the Clinique," quoted in *Zelda*, p. 183.
- 34) F. Scott Fitzgerald, *The Basil and Josephine Stories* (New York: Scribners, 1973), p. 188. (以下、作品からの引用は括弧内の数字で示す)
- 35) Constance Drake, "Josephine and Emotional Bankruptcy," *Fitzgerald/Hemingway Annual 1969* (Washington, D. C.,: NCR Microcard Editions, 1969), p. 7.
- 36) Kenneth E. Eble, *F. Scott Fitzgerald* (New Heaven: College & University Press, 1963), p. 116.
- 37) André Le Vot, *F. Scott Fitzgerald: A Biography*, trans. William Byron (New York: Doubleday, 1983), p. 51.
- 38) Richard D. Lehan, *F. Scott Fitzgerald and the Craft of Fiction* (Southern Illinois University Press, 1966), p. 92.
- 39) Ibid.
- 40) Bruccoli, p. 292.
- 41) Eble, p. 115.
- 42) Henry Dan Piper, *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait* (London: Bodely Head, 1966), p. 174.
- 43) Le Vot, p. 255.
- 44) Dean F. Walton, *A Change for Preciseness* (Ann Arbor: University Microfilms International, 1982), p. 257.

- 45) Le Vot, p. 49.
- 46) Ginevra King Pirie to Arthur Mizener, dated Novemer 7, 1947, quoted in *F. Scott Fitzgerald* by Le Vot, p. 50.
- 47) Le Vot, p. 50.
- 48) Drake, p. 11.
- 49) Stephen Wayne Potts, *Scott Fitzgerald: His Career in Magazines* (Ann Arbor: University Microfilms International, 1984), p. 148.
- 50) Lehan, p. 127.
- 51) Higgins, p. 117.
- 52) Bruccoli, p. 342.
- 53) Milford, p. 109.
- 54) Le Vot, p. 178.
- 55) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York: Scribners, 1953), p. 132.
- 56) Idem, *Tender Is the Night in Three Novels* (New York: Scribners, 1953), p. 329.
- 57) Milford, note, p. 240.
- 58) Zelda S. Fitzgerald, *Save Me the Waltz*, p. 72.
- 59) Milford, p. 239.
- 60) Ibid., p. 217.
- 61) Drake, p. 7.
- 62) Turnbull, p. 55.
- 63) Ibid., p. 100.

Bibliography

- Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur*. New York & London: Harcourt Brace Jovanovich, 1981.
- Drake, Constance. “Josephine and Emotional Bankruptcy.” *Fitzgerald/Hemingway Annual*, 1969, pp. 5-13. Washington D. C.: NCR Microcard Editions, 1969.
- Eble, Kenneth, E. *F. Scott Fitzgerald*. New Heaven: College & University Press, 1963.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Basil and Josephine Stories*. Ed. with intro. by Jackson R. Bryer and John Kuehl. New York: Scribners, 1973.
- . *The Great Gatsby*. New York: Scribners, 1953.
- . *Tender Is the Night*. In *Three Novels*. New York: Scribners, 1953.
- . *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, Ed. with intro. by Andrew Turnbull. New York: Scribners, 1963.
- Fitzgerald, S. Zelda. *Save Me the Waltz*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1967.
- Higgins, John A. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Stories*. Jamaica, NY: St. John's University Press, 1971.
- Le Vot, André. *F. Scott Fitzgerald: A Biography*. Translated by William Byron. New York: Doubleday, 1983.
- Lehan, Richard D. *F. Scott Fitzgerald and the Craft of Fiction*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1966.
- Milford, Nancy. *Zelda: A Biography*. New York: Harper and Row, 1970.

- Mizener, Arthur. *The Far Side of Paradise : A Biography of F. Scott Fitzgerald*. London : Heinemann, 1969.
- Piper, Henry Dan. *F. Scott Fitzgerald : A Critical Portrait*. London : Bodely Head, 1966.
- Potts, Stephen Wayne. *Scott Fitzgerald : His Career in Magazines*. Ann Arbor : University Microfilms International, 1984.
- Sklar, Robert. *F. Scott Fitzgerald : The Last Laocoön*. New York : Oxford University Press, 1967.
- Walton, Dean F. *A Change for Preciseness*. Ann Arbor : University Microfilms International, 1982.